

3学期の教育実践

山鹿市立鹿北中学校

1 知育

(1) 一人一人が自立した学習者に

この言葉は生徒にも先生方にも当てはまります。

生徒としては、

- ① まず家庭学習習慣を確立すること。
- ② 新学びの姿を実践し、「わからない」をわからないままにしない。
- ③ 自分に合った学習方法を見つけること

先生方としては、

- ① 自ら授業改善に取り組む → 授業改善プロジェクト実践の日常化
- ② 個別最適な学びの提供 → 誰一人取り残さない学び
- ③ 学級内習熟度別学習の実践 → タブレット活用等
- ④ 「わからない」が言える雰囲気づくり
- ⑤ 生徒の学びへのモチベーションを上げる工夫・努力

(2) 読書活動の工夫・改善

10分間読書の実施

- 感想や気づきなど自分の心で感じたことをの記録化 → ふせん利用
ふせんをもとに、自分が感じたことを深掘りする活動を取り入れる
→ 感じたことを表現する力→感想や意見のアウトプット化・語彙力

2 徳育

(1) 学級のなかまづくり

- ① **1・2年生**は、班活動・班長会の計画的実施
→ 学級の課題解決やレクリエーションの企画等
→ 班ノートの実施→少しずつ内容面でのレベルアップを図る。
- ② **1年生**
もう一度「出会い直し」を行う。「あの人はこういう人」と決めつけず、周囲の友だちのいいところを見つめられる活動の工夫
Ⅱ期への移行を意識化 → 自分たちの立ち位置の変化の自覚。
理想の先輩像とは。
- ③ **2年生**
自分たちが学校を創っていくという意識を高める。
生徒会活動へのモチベーションをどう行動化・実践化できるか

④ 3年生

1・2年生が憧れる学級づくりを

「自分を語る」取り組み → 進路公開 ※進学先公開にならないように
進路決定した生徒→新たな目標設定 → 「学び」・「成長」を止めない

3 体育

(1) 朝のランニング

- 個人目標を設定するなど取組の工夫
→ 定期的に設定目標で何周走れるかなどの工夫

(2) メディアコントロール

- 「せいりゅう」の意識化・実践化 → 生活設計力を身につける。

(3) 部活動

- ① キャプテン会・部活動集会を計画的に開催
- ② 小学6年生の部活動体験入部への対応

4 年度初めに示した方針より

教員に求められる資質・能力は、「わかりやすく教えること」であることは間違いないことですが、生徒をケアし、やる気に火をつけるファシリテーターやコーディネーターといった役割が大きくなってきていることに対応できる一人ひとりでありたい。

「平凡な教師は言って聞かせる。よい教師は説明する。優秀な教師はやってみせる。しかし、最高の教師は子どもの心に火をつける」と言われる通りです。

子どもたちの頑張りがわかる、喜びや悩みを共有し、責任転嫁しない、けっしてあきらめない。そして、一人一人が魅力ある生き方ができる教職員でありたい。

「木は光を浴びて育つ。人は言葉を浴びて育つ」と言われるように、私たちの言語環境を整えていくことは何より大切となります。

鹿北中の方向性

令和3年の生徒会活動 ～成果と課題～

1 リーダーとしての責任

(1) 旅の目的地

何をどのように前進させてどこまで行くのかを具体的に示す。

(2) 旅の行程・方法

目的地へ行くのは、どの道をどのように進んでいくのかを示す。

(3) 旅に出る理由

みんなに目的地に行きたいと思わせることができる。

2 手段と目的を区別

(1) 学校を良くする・発展させることは目的ではなく手段。目的は、あくまでも鹿北中生の成長であり自立。

(2) 学校を「前進」させることは手段。学校を「前進」させることで、みんなが何を獲得したいのか、みんながどう変容したいのかが目的。この目的を明らかにする。

(3) テーマとコンセプトに合った活動を創造し実践する。

活動・実践を通して何を獲得するのか、どう成長するのか → 生徒会活動の本質

3 テーマとコンセプトを意識した実践・取組

(1) **テーマ**・・・活動や創造において基盤となる考え。根底に流れる主題

(2) **コンセプト**・・・テーマを生かすため、実現するための発想や観点。

令和3年の生徒会活動で言えば、生徒会年間テーマに基づいた活動を通して、どんな力をつけたいのか、どんな生徒に成長したいのかが大切。

たとえば、

令和3年 生徒会活動

(1) テーマ（目指す姿）

間違ってもいい、失敗してもいいからチャレンジし続ける鹿北中生

(2) コンセプト（合言葉）

Try & Error ～挑戦とステキな失敗～

(3) 活動・実践

毎月の生徒会活動・小中合同運動会・清流祭・芸術の森・ふるさと自慢こどもまつり
震災復興の取組（しあわせ運べるように・花は咲く）、山のいぶき・期の活動・・・

(4) 結果

「自分たちから」という学校文化を創る。先生方から言われる前に自ら動く、自ら気づく。先生から指導される前に、自分たちで直していく、解決していく生徒へ成長。

4 思考・創造のヒント

令和3年、鹿北中学生徒会は、「間違ってもいい、失敗してもいいからチャレンジし続ける鹿北中生」という目標をかかげ、様々な挑戦を繰り返してきました。

学校というところは、正しいことが求められることが多いところです。

(1) しかし、あえて、「間違ってもいい、失敗してもいい学校」を鹿北中は目指しました。今までの日本の学校とは違う方向に、自分たちが進むべき「道」を新たに創ろうとしたことは、実はとてもすごいことだと思います。

「間違えたらどうしよう。失敗したらどうしよう」などと考えていたら、挑戦なんてできない。だから、「間違えること、失敗することが当たり前なんだ」という文化を学校に創ろうとしたこと、そこに鹿北中の新たな進むべき道が見えています。

(2) 自分たちで「ゼロ」から「一」を生み出し、道がないところに自分たちで道を創る。そんな挑戦を試行錯誤しながらもやり遂げました。

この取組を支えたのが「自分たちから」という考え方でした。

先生方から言われる前に、考える、話し合う、動く。ここにも、鹿北中生が進むべき新たな「道」が見えてきていると思います。

昭和から平成、そして、令和と時代が進み中で、みんながある程度同じことができることに意味がある時代から、今は、「他人と違う」ことに意味や価値がある時代へと大きく変わってきました。それにも関わらず、いまだに多くの学校では、「みんなと同じであることが安心」といった強烈な「同調圧力」が残っています。

また ゼロから1を生み出そうとする時、目標達成に向けてチャレンジしている時、今までの自分の殻を破ろうとしている時・・・、そんな時は、必ずと言っていいほど「失敗」がつきものです。失敗することが当たり前であるにも関わらず、失敗することや間違えることを極端に恐れてしまい、消極的になったり、チャレンジするのを躊躇してしまう。そんな中学生が全国にはまだまだたくさんいます。

そういう状況の中で、さきほど話したように、鹿北中が新たに切り拓いて、進もうとしている「道」は、すべての学校の模範となり、今までの日本になかった新しい時代を切り拓く「道」につながっていると考えます。

5 これからのリーダー

「最初の一人」になる覚悟